

アパートの外から救急車や消防車のサイレンが聞こえる。テレビをつける。悲劇に直面する。アパートの隣人はパニックになり窓から椅子や鏡を投げ飛ばす。目の前にはペンタゴンから避難する人の列が途切れることなく続く。そして町には人影がなくなり、静寂が

「センター」が制作された。スクリーンに広がる「クリアスカイ(雲ひとつない青空)」に胸が締め付けられるのは、あの日の覚悟を思いだすからだろうか。

週刊

コラム

日本人の多くは「ワールド・トレード・センター」を見て「家族の愛を強く感じた」とコメントする。確かにオリバー・ストーン監督は家族や仲間同士のきずなを描いているが、アメリカの観客の反応は違う。「ヒーローがいる国でよかった」

訪れる。テレビの前でかたずをのんで大統領のメッセージを待つ。これが、当時米国に留学していた私の2001年9月11日である。米国民それぞれに忘れられない9・11のストーリーがある。5年がたち実話に基づく映画「ユナイテッド93」「ワールド・トレード

国を守る覚悟

アメリカの誇りをかけた国民一人一人である。テロとの対峙は映画の中だけの話でも過去の出来事でもない。米国にとっては現在進行形である。米国では上下両院議員を選ぶ中間選挙まで1週間。投票に行くかどうか迷っている人を動かすのは、対テロ戦争やイラク情勢といった争点だろう。投票という行動で国家の外交政策に参画する。

◇

米軍基地を抱える神奈川県に住む私たちは、日本の国家戦略にどれだけの関心を払っているだろうか。米軍が守ってくれるから、日本には9・11が起きないのだろうか。国際関係は専門家に任せて、外交は国民の関与すべき課題ではないと考えるのか。

北朝鮮やテロの脅威に直面しているのは日本国民である。そして米国の戦略拠点である米軍と共存しているのは神奈川県民である。米軍の存在が近いあまり、日本の外交戦略の議論すら放棄してしまっているとしたら、本末転倒である。米国の国家指針を肌で感じられる場所にいるからこそ日本の安全保障や国際貢献を考えなければならぬ。

テロを扱った2本の映画の主役は大統領でも政治家でもなく、一般の国民である。民主主義国家を支える一市民の決断、勇氣、行動がいかに重要であるかを私たちに問いかけている。私たちに国を守る覚悟があるのだろうか。



東京純心女子大講師
早大大学院研究員

牧島可憐